

こづか 小柄工房 「初級編」

かじ手伝い 翁和人

ちょっと鍛冶かじってみませんか？

「小柄こづか作かってじまない？」兄からの誘いがこの世界にはまり込んだきっかけである。

兄がブドウショップのHPを見つけ、食指が動き、自分がやりたくなったようである。私と刀の縁といえば子供の頃、剣道を習ったくらいで、せいぜい段級審査で模擬刀を握った程度。ましてや本物の刀など実際に手にした事などなかった。

「小柄こづかってなんだ？」聞くと「脇差かの短いもの」のような返答。ペーパーナイフをイメージすれば近いのだろうか？刀匠から直に教わりながら手作り出来ると云うのだ。

「鍛冶かじ」「職人」「手作り」心をくすぐる言葉の連続だった

熱い炎で鉄の塊を溶かし、それを鉄鎚かなづち(カナヅチ)で叩き、みるみるうちに刀の形に整え、いつの間にか長い日本刀を作る…映像をテレビか何かで見た記憶。そんなことが体験できるのかと期待し、兄の小柄こづか工房体験について行く事にした。これがきっかけでこの世界に入り、今では鍛冶かじ仕事の手伝いをさせて貰っている私が、当時を思い返しながら小柄こづか工房を紹介させていただく。

誘われる匠の世界

ブドウショップの小柄こづか工房案内で触れているが、場所は都内である。

東京 23 区内で鍛冶かじ仕事が出来るとは門外漢にはそれだけでも驚きであろう。

講座の当日は初対面のご挨拶がすむと、お茶をいただきながら先ず刀のイロハを

初心者に解るように面白く解説される。刀の様々な部位名称、歴史、刀剣鑑賞の作法、地肌、刃文、その見方など刀剣独特の世界を紹介していただく。ひととおり説明が終わり心の準備が整う頃によいよ作業を始めることになる。

初級編では火を扱う作業は少ないが、焼き入れがあるので火傷の可能性もある。鉄の削りカスも身体に付着するので、ある程度の「備え」は必要である。汚れても良い格好で、ゴーグルにマスクもあった方が良い。手拭いなどで頭を覆うとそれらしくなる。せっかくだから筆筒に眠っている作務衣を引っ張り出してきても楽しいだろう。念のため火傷対策に長袖のアンダーシャツを忘れてはならない。(化繊は不可)

最初に渡されるのは「^{たまはがね}玉鋼の板」

「鋼と鉄の違いは？」と思う向きもいるであろうから少々解説すると、鉄 Iron 鋼 Steel は炭素量の違いで区別する。鉄は炭素が少なく柔らかく成形に適す。

鋼は一定の炭素量を有し「焼き」を入れることによって脆^{もろ}いが硬くなるという特性がある。

見た目には大して変わらないが実は違いがある。冶金学や鋳物では、炭素量の少ない鉄を

軟鉄として区別している。ほかに銑^{せん}や鋳^いというものがあり、これは鋼より炭素量が多い状

態のものを指す。火床で^{ほど}玉鋼^{たまはがね}(砂鉄を精錬して溶岩の塊のような状態になった鉄の塊)を鍛錬(鉄を叩いて鍛える)して形を整えながら炭素量などの調整も行うが、このあたりの作業は「上級編」の作業なのでそちらで触れることにする。

「^{たまはがね}玉鋼の板」を^{やすり}鑢、^{かなづち}鉄鎚、^{せん}銑(ここでは^{かんな}鉋に似たような鉄を削る鍛冶道具のこと)などを使い、刀の形に成形していく。

^{やすり}鑢で鉄が削られ、^{かなづち}鉄鎚で曲がっていくのはある程度想像もつくが、^{せん}銑で鉄が削られる様

はちょっとした驚きである。^{かんな}鉋で木を削るのは日曜大工や、学校の技術実習の授業でも記

憶があると思うが、^{せん}銑もそんな感じで鉄を削れるのである。ちょっと不思議に思うかもし

れないが、実際にやってみると確かに削れる。先にも触れたが鉄といっても炭素量、焼き

入れ等の関係で硬さに違いがあるので、「削る」「削られる」違いが出てくるのだ。

最初は道具などの持ち方や姿勢が悪いと全然削れないので結構苦勞する。逆に勢い余って余計に削ってしまうかもと心配もする人もいるだろう。そのあたりは刀匠がしっかり指導してくれるので心配はいらない。

自分では分からないが、刀匠の目を通すと判別できるような、「曲がり」や「凸凹」など不細工な箇所を修正し、言われるままに夢中で玉鋼^{たまはがね}を削り続けていくと徐々に刀の形が見えてくる。中子(ナカゴ：刀を握る柄に入っている部分)をつくり体裁を整える。最後の焼き入れの時に熱の急激な変化から刀に反りが生じるので予め伏せる作業(内反りをつける)をここで行う。後の作業を勘定するというのも職人の世界の一端で面白く感じる。

そして化粧^{やすり}鑢(見栄えを良くする^{やすり}鑢掛)を施し、自分の名前などの銘を鑿^{たがね}で切る。

懸命に削り叩いた鉄の板がそれなりに刀のかたちを呈してくると結構感動する。

そしていよいよ作業のクライマックス「焼き入れ」へと進んでいく。

仕上げの焼入れ

鋼は脆^{もろ}いが硬いと先に述べたが、この状態のままでは削ることが出来るくらい柔らかい。

ではどうすれば硬くなるのかというと「焼き入れ」が必要になってくる。

「鋼をある温度まで熱して急激に冷やすことによって化学変化が起き硬化する」程度に理解していれば構わない。冶金学的にはマルテンサイトやトールサイト、ソルバイトなど専門用語が並ぶ複雑な処理である。

刀鍛冶^{かじ}はそれを伝承と経験で行ってきたのだから改めて脱帽である。

刀全面に焼きを入れると、しなやかさがなくなって簡単に折れてしまう。そこでしなやかさを維持する部分を残しておく作業が必要になる。「焼き刃土」という粘土を塗ることによって、焼きが入らない部分を意図的に作るのだ。硬さとしなやかさの両方を得ることが出来る。粘土を塗り、刃にする部分の粘土を取り除く。取り除いた部分に焼きが入り、焼きの入らない境目が刃文となる。日本刀の世界では肝心なところでもあるので丁寧に作業したい。塗り終わった粘土を乾燥させて、焼入れへと作業は進む。焼き入れは温度が肝心なので部屋を暗くし、刀匠が炎の色と鋼の色をしっかりと吟味する。頃合い良く熱した刀身を刀匠の合図に合わせて水桶に入れて急冷し焼入れが完了する。

土を落とし、刃文が出ているかを確認。感動の一瞬である。私自身は刃文の確認にも感動したが、反りを見込んだ伏せが奏効し、真直ぐな小柄こづかが出来ているのにも驚きを感じたのを覚えている。

こうして初級編は終了するが、まだ小柄こづかとしての完成ではなく、この後は刀身をと研ぎ白鞘しろきやに収めるまでに時間を貰うことになるので暫しご辛抱を。

以上が小柄こづか工房初級編の概要で、むずかしい作業は少なく、美味しいところ取りの工程で手軽に伝統の鍛冶かじ技術を体験し自作の小柄こづかを手に入れることが出来るのは嬉しかった。

小柄こづか工房「初級編」はあくまでも刀鍛冶かじ仕事のさわりを楽しく体験する講座なので初心者でも気軽に参加できる。刀鍛冶かじ仕事のハイライトである本格的かつ伝統的な焼き入れの作業を行うのが一番の魅力である。

「中級編」になると初級編では刀匠が事前に準備していた作業も体験できるようになる。

鍛冶かじ仕事のもう一つのハイライト(鉄塊を炎で溶かし鉄鎚かなづちで叩く作業)は「上級編」で行う。

了